
静かな雨

漆原さやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かな雨

【Nコード】

N3669M

【作者名】

漆原さやか

【あらすじ】

新撰組一番隊組長「沖田総司」と、吉田稔磨を師と仰ぐ一の「オリキャラ琴菊」の、小さな物語。それは池田屋事件の起こったあの夜に始まった。

2011・07・29 若干手直ししました。

ゴホッ、ゴホッ。

沖田の肩が大きく揺れ、剣先がわずかに下がる。次第に雨は強くなり、すべてを等しく濡らしていく。

「早く、さあ…。」

言葉よりもその眼が、沖田の胸の内を如実に伝えていた。それはまるで懇願

するかのような鬼気迫る想い。

ゴホッ。

大きく咳き込み、膝をついた。咳がやまない。

ゴホッ、ゴホッ。

「沖田さん…。」

口元を押さえた指の隙間から深紅の糸が滴り落ちる。糸は地面で雨と混ざり

合い、滲みながら紅く広がっていった。琴菊はことぎく小太刀を投げ捨て沖田に

駆け寄る。血を吐きながら崩れ落ちる沖田は、しかしまだあきらめきれずにいた。

島原の夜はどこもかしこも、三味の音や女たちの嬌声で賑わっていた。

「琴菊、こちらへ。」

あけさと

酒も程よく進んだ頃、明里に呼ばれ、一人の少女が部屋に入る。

始めて

菊の描かれた、華やかさをやや押さえた着物。まだ勤め

間もないのだろうか。

「うちの妹分で、琴菊いますんや。」

「おや、これはまたかわいい娘さんだね。」

「山南はんは、明里より琴菊のほうがよろしおすか？」

目を細めて言う山南に、明里は拗ねたように返す。

「そんなことないさ。」

山南は明里に静かに微笑んだ。

「琴菊、山南はんと沖田はんや。挨拶しい。」

促され琴菊は指をつき頭を垂れた。

「琴菊と申します。沖田はん、山南はん、どうぞよろし

ゆう。」

沖田はじつと、琴菊を見つめた。

「沖田君、どうした。」

明里からの酌を受け、山南は程よく酔っていた。

「…いえ、なんでも。」

沖田は屈託のない笑顔をすつと浮かべた。

「山南はん、別に部屋をご用意さしてもとりますえ。」

明里は山南にそつと寄り添う。酔いのせいか、ほんのり

顔を

火照らせた山南は、ちらりと沖田を見る。

「私のことなら気にしないでください。お二人の時間を

邪魔するような

野暮なことはしませんよ。」

山南の意を察して沖田が答えた。天真爛漫なこの笑顔に、

山南はこれまで

どれ程救われたことだろう。こと、土方との対立に関し

ては。

「それじゃあ、ちょっと失礼するよ。」

感謝を笑みに変えて山南は立ち上がった。

「ほな。」

そのあとに明里も続く。すつと襖が閉じられた。琴菊は沖田に進み寄り、

隣で酌をした。ひとことも交わさぬ二人。最初に口火を切ったのは、

沖田だった。

「あの晩以来ですね。こうしてはつきり姿を見るのは、

」

注がれた酒をぐいと呑み干す。沖田の言う「あの晩」が

池田屋事件を

指していることは明らかだった。

やはり、この人は気付いていた。

「お気付きでしたか。」

先ほどのゆつたりとした京ことばとは違う。沖田は黙ってうなずいた。

「吉田先生の無念を晴らさせていただきたく。」

そのために、新撰組隊士が多く忍んでくるといふこの輪違屋に潜り込んだ

のだ。琴菊は空になった盃に再び酒を注いだ。

「吉田…。吉田稔磨、ですか。」

それをまた沖田が呑んだ。

あの晩、池田屋に集まっていたところを襲撃された一派は苦戦を

強いられ、吉田は琴菊に「逃げろ」と言った。しかし琴菊はその場を

離れることができずにいた。本能で感じていたのだ。そ

れが、琴菊を

くノ一に育てた吉田との最期だと。斬ったのは新撰組一番隊長長、

沖田総司。

「いつにしますか？」

沖田の明るい声。何気ない約束の日取りを相談するような口ぶり。

「私に、斬れるでしょうか。あなたを。」

答えるかわりに問いかける。本当にこれが、あの晩吉田を斬った

男なのだろうか。やはり未だに信じられない。顔は同じなのに、

表情は全く違う。穏やかな笑顔。刀を手にしたときと、

あまりにも

違いすぎる。

「斬ってください。」

静かな、しかし凜とした声。揶揄しているわけではない。それは

沖田の本心であり、望みだった。

刻々と迫る死の足音。新撰組の誰もが明日をも知れぬ身ではあるが、

沖田のそれは他の隊士とは質を違えていた。内憂には踏む足ごとに変わる

世相と新撰組の分派を抱え、外患には労咳という死病を抱えていた。

近藤は療養を勧めた。土方もそれに同意した。しかし沖田はそれを良しと

はしなかった。もとより死に対する恐れなど持ち合わせ

てはいない。沖田が

恐れているのは、剣を持たずして死を迎えること。近藤のような忠義心も、

土方のような野心も沖田には遙か遠く、銜う気性でもなかったが、それ

でも、いや、それゆえに、剣に生きたいと願う想いは誰よりも真摯で激し

かった。剣は沖田にとって生きる道であり、己のすべて地に足を踏み

剣を振っていられる間は、沖田は新撰組一番隊組長であり、沖田総司で

いられた。静かに零れ落ちる生命の砂音に、耳を塞ぎたくなりながらも。

そして沖田はひたすら斬った。斬って斬って斬り続けた。狂気に任せ、

「人斬りの沖田」と呼ばれる程に。そして斬った後、人知れず絶望に暮れた。

琴菊は初めて沖田を正面から見つめた。行燈の明かりがゆらゆら揺れ、

沖田の顔に影を作りながら照らしていた。

「沖田さんは、なぜ新撰組に？」

ずっと胸に抱いてきた疑問を口にした。

新撰組だから、人を斬るのか。人を斬るから、新撰組なのか。

あの日から、ずっと沖田を見てきた。寺で無邪気に子供たちと遊んで

いるときの顔。土方に叱られ拗ねたときの顔。永倉や藤堂、原田が

ふざけあっているのを微笑みながら眺めていたときの顔。そのどれもが、

「人斬りの沖田」と呼ばれるには相応しいものではなかった。

「『なぜ』ですか。難しい質問ですね。敢えて言うなら、きつと

探しているんですよ。」

そう、探しているんです。

沖田はそつと盃を見つめた。

うす曇り。時々日差しが見え隠れする。寺へと続く階段を登りきると、沖田は

先に来ていた。だんだら模様の浅葱色の羽織。刀を膝に挟み、木の根元に腰かけている。穏やかに眼を閉じている様は、眠っているのだろうか。しかし顔色があまりよくない。

「沖田さん。」

呼んでも動かぬ沖田に近づき、そつと肩に触れる。不意に、抱きしめたい衝動に駆られた。

（吉田先生、すみません。先生のためではなく、この人のために私はこの人を斬ります。私は・・・私は・・・）
彼が求めるなら、私が差し出そう。

彼の死に場所を。

「待っていましたよ。」

ゆつくりと沖田が眼を開く。ひとつ、ふたつ。地面に雨の雫が染み込んでいく。

徐々に立ち込める雨の匂い。

「雨、ですね。」

鬱蒼と茂る木々の葉にも雨は落ち、さらさらと音を奏でる。

沖田はゆつくりと立ち上がった。紫陽花の葉から雫がひとつ、こぼれおちる。

「雨は、嫌いじゃありません。」

静かに微笑む。琴菊は何も言わない。

「さあ、始めましょうか。」

それが合図だった。沖田の言葉に俯いたままだった琴菊はすつと顔を上げた。

キツと沖田を見据える。頭上を鉛色の雲が流れていく。湿った空気。

沖田は菊一文字を、琴菊は名もない小太刀を、それぞれ鞘から抜いた。

互いに間合いを取りながら機を窺う。最初に踏み出したのは琴菊だった。

右袈裟がけに狙ったが切っ先で弾かれる。

ギイイン！！！！

間髪入れずに上段を狙うが、沖田も俊敏な動きでこれを受ける。

沖田がじりじりと押してくる。これを今度は琴菊が切っ先へ流して弾き面を狙う。

しかしこれも沖田は受け、互いに引かぬ接戦となる。剣が激しくぶつかり合う。

刹那。

ゴホッ。

ほんの一瞬、沖田の力が緩んだ。琴菊に勝機が見えた。が、わずか

な躊躇がそれを

逃す。小太刀は再び弾かれた。その勢いに任せて琴菊は沖田の間合いから転がり出た。

すぐに態勢を立て直す。

来る！

受けをとる。沖田は刃を外側へと水平に剣を構えた。沖田が得意とする三段突き。

これをかわすのは無理だ、と思った。

その時。

ゴホッ、ゴホッ。

沖田の肩が大きく揺れ、剣先がわずかに下がる。次第に雨は強くなり、すべてを

等しく濡らしていった。

「早く、さあ…。」

今だ。今ならやれるはず。あなたなら。

言葉よりもその眼が、沖田の胸の内を如実に伝えていた。それはまるで懇願

するかのような、鬼気迫る想い。

早く。

早く！

早くっ！

斬り合って死ねるかもしれない今があるうちに！

じゃないと、間に合わなくなる…。

ゴホッ。

大きく咳き込み、膝をついた。咳がやまない。

ゴホッ、ゴホッ。

「沖田さん…。」

口元を押さえた指の隙間から深紅の糸が滴り落ちる。糸は地面で雨

と混ざり

合い、滲みながら紅く広がっていった。琴菊は小太刀を投げ捨て沖田に駆け寄る。

死の華に導かれるように崩れていく沖田の肩を、琴菊はひしと掴んだ。剣を沖田の

手から取るうとすると、それを拒むかのようにわずかに力がこもる。沖田はまだ

あきらめていないのだ、と思うと琴菊は胸の奥が苦しくなった。それでも無理やり

剣を奪い、鞘に納める。沖田を支えながら寺の境内に運び、そつとその体を横たえた。

菊一文字をその隣に置いてやる。雨はまだ、静かに降り続いている。琴菊は手拭いで

そつと沖田の口元を拭いた。咳はやんだものの、苦しそうに上下する胸。呼吸のたびに

喘鳴する喉。髪から滴る雫に混じって、すう、と涙がこめかみを伝う。

沖田は泣いていた。

「また…逃してしまった…。あなたも…吉田の…仇を…取れなくなる…。」

琴菊は黙って沖田を見つめた。血がついたままの手を握る。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

突如、階段を急ぎ足で駆け上ってくる足音。

「土方さんだ…。」

沖田に刀を向けた琴菊がここで土方と顔を合わせればただでは済むまい。

琴菊は立ち去ろうとした。それを沖田が腕を掴んで止める。

「行かないほうがいい…。下手に…立ち去ろうとすれば…斬られま

すよ…。」

階段を登りきった土方が走ってくる。着物の裾が泥水で汚れるのも気にせずに。

「総司！！！」

沖田の紅く染まった着物を見る。琴菊のことなどまるで眼中にない。

「おめえまた…！！！」

肩で息をしながら沖田を怒鳴りつける。どれほど必死に走ってきたのだろう、

この男は。

「大丈夫です…大したこと…ありませんよ。」

微笑む沖田。まるでいたずらを見つけた子供のような。

「馬鹿野郎っ。だから言っただろう、屯所でおとなしく寝てろってっ。」

顔を真っ赤にして怒る土方。

「心配性だなあ…土方さんは…。」

とりあえず沖田の安否を確認できて落ち着いた土方は初めて琴菊のほうへ

向き直った。眼光の鋭い男だった。

「この娘は…？」

何者だ、と言いたげに睨む。男はごく自然な動きで刀に手を添えた。竹刀だこのある、

節くれ立った手。

「通りすがりの方ですよ…。」

沖田の言葉を聞きながら、琴菊への視線は外さない。じりじりと刺してくるような

視線。土方は少し考え込んでから、駆け上ってきた階段のほうへと無言のまま足を

向けた。そして再び戻ってきた土方が手にしていたのは、先程琴菊が投げ捨てた

小太刀。それを静かに琴菊へ差し出した。

「沖田が世話になった。」

ただ一言だけそう告げる。おおその事情を知った上で、土方は知らぬふりをした。

沖田がそれを望むのなら。

琴菊が小太刀を受け取ると、土方は沖田を肩から支え立ち上がった。

「……ありがとうございます。」

そう言つて沖田は笑つていた。透き通るような笑顔で。その瞳はどこか哀しげにさえ

見える。沖田はきつとこれから先も、何もかもをその笑顔で包み隠してゆくのだらう。

少しずつ遠ざかる沖田と土方。二人の背中を見送りながら、琴菊は泣いた。声をあげて、

子供のように泣いた。

雨が降り注ぐ。すべてをやさしく包むように。琴菊の涙を隠すように。

もう二度と、沖田に会うことはないだらう、と思つた。

（後書き）

琴菊の沖田に惹かれていく心情や過程、それに池田屋事件についてをもっと書けたらよかったんですが、こんな仕上がりになってしまいました、あしからず^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669m/>

静かな雨

2011年11月16日07時46分発行